

かんちゃんなみちゃんの
メルヘンの里めぐり

鈴木 克子

秋の三連休を利用してかんちゃんなみちゃんお母さんの三人は、お母さんの故郷ふるさと函南町桑原のおじいちゃんおばあちゃんの家を訪れました。

「田代の叔父さん叔母さんにはお父さんが交通事故で入院した時、お米やお野菜をどっさり持って東京までお見舞いに来てくださったわ」

とお母さんはしみじみ言いました。

「そうだったね。本当に良くしてもらったもの。お礼に伺わなければね」

「ええ。そのつもりで来たの。私も久し振りに田代の家へ行きたいもの」

「そうだね、それがいいよ。かんちゃんなみちゃん、明日は田代へ行こう」

二人は嬉しそうに「ハロー」と声を揃えて返事をしました。

翌日、カーブの多い山道をおじいちゃんの運転する車は田代をめざしました。

山道の両側はうっそうと木々が生い繁り、車はほとんど通りません。早くも紅葉が始まっている木がありました。

最後のカーブを曲がると右手には広々とした畑、左手には田んぼが広がっていて、右手奥には田代の家々が建ち並んでおりました。

その昔、函南町の東の端の静かな山里、田代村、軽井沢村、丹那村、畑村があり四ヶ村と

呼ばれておりました。

明治十八年、この四ヶ村と他の十ヶ村、そして駿東郡日守村を加えて、函南村となりました。

そして昭和三八年、町制の施行により函南村から、函南町となったのです。

その中の田代村には江戸時代から明治の初め頃、十六軒の人々が仲良く助け合って暮らしておりました。

今では四十軒となりその中にかんちゃんなみちゃんの叔父さん叔母さんの家がありました。叔父さんと叔母さんは家の前で首を長くして待っていてくれました。

「まあまあ、遠くからよく来てくれたねえ。さあさあ上がって上がって」
「よく来た、よく来た」

と二人ともにここにこと大歓迎です。

挨拶がすむと叔母さんとお母さんは昔話に夢中でした。

「私、賑やかなここのお家がよくて子どもの頃、用事を作っては泊まりに来たわ」

「そうだったわねえ。ここには子どもが大勢いて、まるで学童保育所のようなもの」
「お手伝いもよくしてくれて助かったよ」

と叔父さんが言いました。

「みんなで牛のエサの草刈りや野菜を収穫して運んだり、子守りもしたわね。お手伝いした後のおやつや食事の美味しかったこと！」

お母さんは当時は思い出して、子どものような顔をして言いました。

「おやつと言えば家で採れた物ばかり……。春には新じゃが芋の塩茹で、夏はトマトやスイカ、トウモロコシ、秋には茹で栗やさつま芋だったわねえ」

「体をよく動かして働き、みんなと一緒に食べるからよけい美味しかっただろうねえ」

と叔父さんが言いました。

「叔父さんの子どもの頃はどんな遊びをしていたの？」

とかんちゃんは聞きました。

「男の子はね、竹トンボ、水でっぼう、凧づくり、虫かご作りをしてそれで遊んだけれど作っている時から楽しかったよ。チャンバラごっこ、陣地取り、メンコなど色々やったなあ」

「女の子はね、ままごと、あやとり、ゴム跳びなど、押しくらまんじゅうは男の子もやったわねえ」

「でも遊んでばかりいないで、どの子も家の手伝いはよくしたなあ。水汲み、風呂焚き、たき木取り、庭掃除などをね」

「昔の子どもは遊ぶものを作ったり、お家のお手伝いをしたり忙しかったわねえ」となみちゃんは目を丸くして言いました。

「遊び仲間にはね、ガキ大将がいて皆で仲良く遊ぶルールをきちんと教えてくれたんだよ」「お話を聞いているだけでなんだか楽しくなってくるよ。大勢で仲良く遊ぶっていいなあ」とかんちゃんは羨ましそうに言いました。

次の日に軽井沢、丹那、畑の見学を勧められてその晩、田代に泊めて頂きました。

「軽井沢には『猫おどり』の民話があるんだよ」

「えー！ 『猫おどり』ってどんなお話なの？」

叔父さんが話してくれました。

むかしむかし、軽井沢の富士蔵じいさんが田代の親せきに行つての帰り、夜遅く村はずれの竹やぶの前を通りかかると、誰か人の話し声が聞えてきたんだと……。

「ハテナ？ こんな夜更けに誰だろう？」

と富士蔵じいさんが聞き耳をたてていると何人かの声がするのでした。

「みんな集まったかい？」

「いや、まだ上のしろが来ていないぜ」

「いつも早いのに今夜に限ってどうしたずら」

「アッ！　しろが来たぜ」

「今夜に限っておめえが遅いので、踊りの練習ができないじゃないか。みんなうずうずして待っていたんだぞ。オーイ！　たま、とら、はち、みけ、くろ、みんな居るかあ」

「ヘーイ、飛んできたんだよう」

と猫たちは一斉に返事をしました。

「じゃあ今夜は、全員揃ったから朝方まで踊ろうぜ。しろよ、今夜も笛を吹いておくれ」

「俺は今夜だめだ。舌にやけどをしちゃっているんだよ」

「どうしてやけどを？」

「夕飯が遅くなったんで早く食べていくべえと、熱いみそ汁をあわてて飲み込み、それで舌をやけどしたのさ」

「しかなねえなあ、今夜はよすとするか。おい、しろよ、大事にしろよ。早く治して明日の晩よけいにやんべえ」

富士蔵じいさんは急いで家へ帰り、ばあさんに竹やぶのことを話しました。そして、

「ばあさんや、今夜しろに何を食べさせた？」

と聞きました。

「いつまでもグウグウ寝ているから目をさますように、熱いみそ汁を飲ませてやっただよ」

「やっぱり竹やぶにいたのは猫たちだったのか！ 猫が人間そっくりの話をするなんて、あいつらはみんな化け猫なんだ！」

じいさんとばあさんは、竹やぶから帰ってきたしろをつかまえて言いました。

「猫には猫の仕事があるので、夜遊びばかりして……。ネズミを捕ってくれないと困るだよ」

「お前みたいにネズミも捕らないで人間の話をしたり、踊りをやったりする化け猫を、家へ置いておくわけにはいかねえ」

するとその日から、村じゅうの猫が姿を消してしまったということです。

「これが軽井沢に伝わる『猫おどり』の民話だよ」

「私、ドキドキしちゃった」

となみちゃんはホッとしたように言いました。

この民話を元に町おこしとして丹那盆地地域で「猫おどり」を楽しみながら「盆おどり大

会」が広がっていったのです。

数年前より「函南町狩野川まつり」と合体。函南町のイベントとして、周辺の市町村から老若男女が猫に扮して創作ダンスを繰り広げて、コンテストも開かれています。

「私、可愛い猫になって踊りたいわ」

「僕もどんなお祭りか見てみたい」

『猫まつり』は毎年八月の初め頃開かれるから遊びにおいで」

「ちょうど夏休み中だから遊びにくるといいよ」

叔父さんと叔母さんが言ってくれたので、二人は夏休みが楽しみと喜びました。

翌日、叔父さんの車で軽井沢を案内してもらいました。

ここ軽井沢には昔、小田原から熱海、軽井沢峠を越えて三島へ行く「根府川通り」という街道がありました。

一七四七年には三四軒の家があり、人口は一四六人で馬が七頭いました。

山の中の集落なのに馬が多いのは、東は熱海村、西は平井村で、馬で荷物を運ぶ仕事をしていた人がいたからです。

それを「人馬継立じんばつぎだたて」と言って宿駅しゆくえきのある街道には必ずあったのです。

「人馬継立て」のための問屋場といやばは、疲れた馬や人足にんそくを継ぎ換えて、荷物を送り出す「駅伝機関」で宿駅の第一の任務でした。

東海道「藤枝宿」には二ヶ所もありました。

その当時軽井沢には、軽井沢峠の山越えを前にして、茶店や旅籠はたごが三、四軒あったと言われています。

明治二五年十二月に「正岡子規」が泊まって詠んだ句が公民館の前に建てられています。

唐きびの からでたく湯や 山の宿

「有名人も泊まって昔はずい分賑わっていたのね」

「泉龍寺の毘沙門堂や駒形堂には「源頼朝」や「平将門」にまつわる伝説や歌も残されているのよ」

とお母さんと叔母さんは話していました。

軽井沢宿しゆくの旅籠や茶店があった所は、今では住宅地で肩寄せ合うように家々が並んでおります。

元庄屋があった所は、現在公民館が建てられていて、その前の道路をまっすぐ南に向かって上り坂を登っていくと、軽井沢峠への道でした。

今では木々が生い繁り入口も定かではありません。

「『人馬継立て』の宿駅の仕事以外にどのようなお仕事をしていたの？」

とかんちゃんは叔父さんに聞きました。

「昔、現金収入のない時代だから、自分の畑で採れた野菜、米、栗、炭などをかごに入れて背負い、軽井沢峠を越えて熱海まで売りに行っただよ。

今では車で二十分で行けるが当時は、三十キロの荷物をかごに入れて背負い、三時間かけて歩いたんだ。

そのことを『熱海あきない』と言って農家のお嫁さんの仕事だったんだよ」

「えっ！三十キロの荷物を背負って山道を三時間も歩いたの！」

「えー私、そんなに歩けない……。子どもはお家でお留守番をしていたの？」

かんちゃんとなみちゃんはびっくりして言いました。

「年の多いお兄さんやお姉さんのいる家や、おばあちゃんあきなのいる家では面倒見てもらっていたが、誰も見る人がいない家では子どもを連れて、商いに出掛けたんだよ」

三十キロの重いかごを背負いやっと一人通れる位の山道を、子ども連れて歩くのは大変なことでした。

「気を付けて歩くのよ」

「うん、僕は大丈夫。お母さん大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。もう少し行くと休める所があるから、そこまで頑張ろうね」

「うん」

「さあ、ここで少し休もうね」

「僕、湧き水を汲んでくるね」

「ありがとう」

「この湧き水は冷たくて美味しいね」

「ほんと！ 美味しいね」

深い緑の木々に覆われた軽井沢峠を見つめていたかんちゃんに、子連れで「熱海あきない」に行く母と子の姿と声が聞こえてくるようでした。

「軽井沢は歴史のある村だね」

「それに『猫おどり』の民話が生まれた『メルヘンの里』ね」

とかんちゃんとなみちゃんは言いました。

次は酪農王国オラツチエを案内してもらいました。

かんちゃん乳は乳製品が大好きなので、ここへ来るのがとても楽しみでした。
なみちゃんもアイスクリームが大好き。

ふれあい広場でうさぎや山羊をスケッチするのを楽しみにしていました。

「丹那牛乳は生産者と工場が近いから鮮度がよくて美味しいわ」

とお母さんが言うのと、

「静岡県東部の学校給食では一日十万本飲まれているよ」

との叔父さんの話に、

「いいなあ、給食でこんな美味しい牛乳を飲めるなんて……」

とかんちゃんなみちゃんは羨ましそうに言いました。

「アッ！ お父さんの大好きなビール工場もあるよ。お土産に買っていきましょうよ」

「そうね、お父さん喜ぶわね」

「ここにいると、とても楽しい幸せな気持ちになれるわ。ここも『メルヘンの里』ね」

オラツチエで楽しい時間を過ごしたかんちゃんなみちゃんは、叔父さん叔母さんの案内で丹那の里めぐりに出発しました。

「ここ丹那、畑地区は丹那トンネル工事が始まるまでは、豊かな水に恵まれていて、水車が一日中廻り豊富な湧き水で、わさびを栽培し小田原方面へ出荷していたんだよ」

「えっ！今と全々違うね」

とかんちゃんなみちゃんはびっくりしました。

「丹那トンネル工事により井戸の水がなくなりました。田んぼの稲は枯れ、畑の野菜が駄目になったばかりでなく、飲み水にも困るようになったんだ。」

丹那トンネル工事のため水が抜けて困った近隣十五の村々が、何度も県や鉄道省と交渉を重ねて、昭和七年解決を図った時の記念碑がこれだよ」

叔父さんが指さした記念碑は、丹那盆地の家々を見守るかのように建てられています。

「水が出なくなると農業ができなくなったから、酪農が盛んになったの？」

とかんちゃんは聞きました。

「それもあるけれどすでに明治の初め頃、こちらの石碑の川口秋平さんは、川口牧場を経営し丹那の人々に酪農を勧め、発展に努力されていたんだよ。」

丹那の代々名主を務めてきた家柄の長男の秋助さんも父の遺志を継ぎ、丹那酪農の発展に大きな功績を残されたんだ」

「もう一つの石碑の井出彦四郎さんは、川口牧場で働きながら牛の育て方を教えたり、牛の病気を治したり、乳牛の改良増殖に努めたそうで、そしてどんな時でもお金を受け取らなかったそうよ」

川口秋平、秋助さん親子、井出彦四郎さんの三人は、丹那酪農発展の功労者と呼ばれています。

代々名主を務めていた川口家の文書によると、一六七五年から一七八四年の一〇九年間に、大洪水や日照り、大地震などの天災により、八回もの大飢饉に襲われています。

特に天明元年から天明四年までの連続の飢饉は前代未聞でした。

米や麦の値段は高騰しあまつさえ「穀留」と称して穀類の売買を禁止したので、食うに食なく、犬、猫、ネズミは食べ尽くし、葛くず、野ビル、彼岸花の球根、どんぐりなど、ありとあらゆる草根木皮を食べて飢えをしのぎ……。果ては餓死するものも少なくなかったのです。

百姓の困窮は筆舌に尽くすことはできないほどでした。

時の名主川口秀房（川口家の十八代の当主で丹那、畑、軽井沢、田代の名主）はこの百姓の窮状を軽視するに忍びず、領主に農民の窮状を訴え、税の減免を嘆願したが聞き入れられ

なかったのです。

そこで秀房は多数百姓のこの窮状を救うには、自分の一命をも賭して直訴^{じきそ}するよりほかはないと決意したのです。

当時の掟として直訴すれば死罪は免れませんでした。

天明四年の秋、名主秀房は、今年とれたシイナ米（実の入っていないモミ）を俵に詰めて、これを馬に積み、百姓の代表数人をつれて領主に強訴^{ごうそ}したのです。

領主は、大變立腹し、上を憚^{はばか}らず役人に対して悪口^{あっこう}した科^{とが}により首を打たれてしまいました。

同行した百姓は震え上って、逃げ帰ったが夜になって名主の遺体をもらいうけ、みんなの手で川口家の屋敷内に手厚く葬りました。

領主は、秀房を死罪とはしたものの「百姓多勢のために身を捨てた義侠心に感じ、税は減免され、また川口家の跡目相続も嫡子・秀則に継がせました。

これを知った百姓たちは歓喜しました。

人々は秀房を「丹那の佐倉宗吾」とたたえ毎年、その命日には線香を手向けて、その冥福を祈りました。

この供養は、明治の末頃まで続いていたそうです。

その当時、お墓の前に植えたヒバの木、三本は、今でも秀房を守るかのように大きくそそり立っています。

このような史実も残されている丹那でした。

「幾多の苦難を乗り越えて丹那盆地は、酪農王国になったんだな」とかんちゃんは思いました。

「丹那トンネルは、日本の鉄道の大動脈となったけれど、丹那盆地始め、周辺の人々が大きな犠牲を払ったことがよくわかったわ」

とお母さんはしみじみ言いました。

「次の畑地区には、世界的に有名な丹那断層があるんだよ」

叔父さんが案内してくれたのは「丹那断層公園」でした。

「断層とは地震の時、地面がズレてできた跡を言うのだが、ここは北伊豆地震により現れた断層の跡だよ」

北伊豆地震は、一九三〇年（昭和五年）十一月二六日、午前四時頃起きて、震源は丹那盆地の地下で、マグニチュード七、震度六の直下型の大地震でした。

函南村は、当時一七三八世帯あり、そのうち1／5強にあたる三九四戸が全壊しました。当時の函南村の人口は、九七一四人、地震による死者は三七人。負傷者は一九五人でした。

「畑、丹那、軽井沢、田代の四ヶ村は、震源地である断層の上やその近くにもかかわらず死者二名、負傷者二八名だったそうよ。

それはね、この地域の地盤が良かったことと、瓦屋根の家が少なかったためですって」

「私が小さかった頃、ひいおじいちゃんひいおばあちゃんから『家が倒れてそれは大変だった』という事をよく聞いたわ」

「だからお母さんは『防災用品』をきちんと備えているんだね」

「これが畑の丹那断層だよ。水平のズレ跡は時間の経過と共に埋もれてしまうため、目で見える場所は世界的に非常に少ないそうだよ」

「世界中の断層や地震などの研究者で、丹那断層を知らない人はいなくて『必ず一度は訪れる』と言われているのよ」

「僕たちはすぐ来て見ることができから幸せだね」

北伊豆地震の時動いた丹那断層は、田代の火雷神社にある断層と同じで、箱根芦ノ湖から修善寺町まで続く、長さ約三十キロメートルの丹那断層帯の代表的な断層で、繰り返し活動してきた活断層です。

昭和十年六月七日、国指定の天然記念物に指定され、公園として保存されています。

田代の叔父さん叔母さんにお世話になったお礼の挨拶をして、迎えに来てくれた桑原のおじいちゃんの車に乗りました。

田代のはずれにある「火雷神社」に寄りました。

「お母さんから田代へ行く事を聞いて調べてきたんだよ」
かんちゃんが説明係でした。

「火雷神社には、昭和五年の北伊豆地震の断層のズレがそのまま残っているんだ。

石段と鳥居がまっすぐだったのが、ほら、鳥居の右側が石段より右にずれて、左側が石段の真ん中までずれているよ」

「断層が神社と鳥居のちょうど真ん中を通っているため、水平のズレがよくわかるのね」

とお母さんが言いました。

「そうだね。主に動いたのは西側の石段だったそうだよ」とおじいちゃん。

「ここ火雷神社の前の田んぼを掘って調べた東大地震研究所の人に、田代の叔父さんが直接聞いたお話によると、『八〇〇年から一二〇〇年間隔で地震は、五十万年前より起きている』そうだよ」

「地震にも長い長い歴史があるのね」

となみちゃんは言いました。

「ここ田代には、田代城と呼ばれる山城があったそうだけど、僕いつか調べたいと思っているよ」

「そうだね。『温故知新』と言って古い事を調べ尋ねて、そこから新しい見方や知識を得ることは、とても大切なことだよ」

「僕、おじいちゃんが教えてくれた『温故知新』忘れないよ」

「私も。そして色々なこと『画』に描いて残していくわ」

おじいちゃんとお母さんは、にこにここと優しくうなずきました。

満開のコスモス畑に寄りました。

「メルヘンの里」と書かれた看板のコスモス畑は、田代の叔父さん叔母さんが長い間、休耕田を利用して、十万本のコスモスの花を咲かせております。

「こんなにコスモスの花がいっぱいに咲いていて本当に『メルヘンの里』だね」

かんちゃんは感心して言いました。そして「メルヘンの里」は自分たちが築いて育てていくことが大切だと思いました。

「きれいなえ。私、花のお姫様になったみたい」

なみちゃんはうっとりしながら言いました。

「いつまでも自然が守られて、平和でありますように」

お母さんは両手を高くあげて言いました。

満開のコスモス畑の中の三人は、澄みきった空に向かって、高く高く両手をあげて深呼吸しました。

これからも田代、軽井沢、丹那、畑の「メルヘンの里」は人々を見守っていつてくれることでしょう。

参考文献

『わたしたちの函南町 二〇〇五年改訂版』 函南町教育委員会

『旦那牛乳創業 60 周年記念誌』 函南町東部農業協同組合

『ふるさと函南の学習 その2』 収録「根府川通の探索」 世古祐三氏

広報かなみ NO 575 平成 26 年 5 月号特集 80 年前そして現代^{いま}

民話 猫おどり 原話 渡辺宗正氏

かなみ猫おどりについて 廣田克巳氏 函南町観光協会

旦那に伝わる史実（川口家文書） 林正敏氏

取材させて頂いた方々

田代在住 渡辺克巳氏

渡辺節子様

他多数

この作品の前作『かんなみ仏の里ものがたり かんちゃんなみちゃんの夏休み』を、函南町立図書館ホームページで読むことができます（PDF版）。また、地域資料として貸出用冊子も所蔵しています。

函南町立図書館ホームページ（短編小説作品一覧）↓



かんちゃんなみちゃんのメルヘンの^{さと}里めぐり

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 ^{すずき}鈴木 ^{かつこ}克子

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

とある秋の日、かんちゃんとなみちゃんは、お母さんと函南町田代の親戚を訪れた。猫おどりや人馬継立など、この土地の歴史をたくさん学ぶ中で二人は何を思うのか。感性豊かな兄妹とともに函南を知る、シリーズ第二弾。

